(19)日本国特許庁(JP)　(12)登録実用新案公報(U)　(11)実用新案登録番号
実用新案登録第3192294号
(U3192294)
(45)発行日　平成26年8月7日(2014.8.7)　(24)登録日　平成26年7月16日(2014.7.16)

(51)Int.Cl.　F I
A47J 43/28 (2006.01)　A47J 43/28

評価書の請求 未請求　請求項の数 1　OL　（全 8 頁）

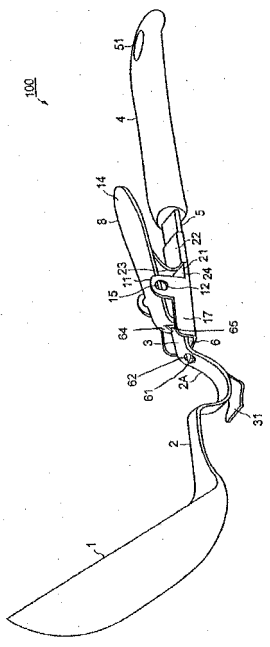
(21)出願番号　実願2014-2722(U2014-2722)
(22)出願日　平成26年5月26日(2014.5.26)

(73)実用新案権者　510130468
有限会社　ソーシャルホーム
茨城県鹿嶋市谷原４４８－１
(74)代理人　110001922
特許業務法人　日峯国際特許事務所
(72)考案者　宮入　学
茨城県鹿嶋市谷原４４８－１
有限会社　ソーシャルホーム内

(54)【考案の名称】お玉の柄とお玉把持柄が分離可能に結合されるお玉

(57)【要約】　（修正有）
【課題】二つの柄の固定・解放に便利であるとう利点を活かしながら、お玉の柄をお玉把持部に固定した時に更なる安定性を付与することが出来るお玉を提供する。
【解決手段】お玉の柄２が、お玉把持柄５と接触部との間に挿入され、挿入された時にお玉の柄先端部が板バネによってお玉把持柄５に押圧される形態が形成され、固定・解放レバー８の操作に伴って突起６１がお玉の柄２に形成された孔６２に挿入され、固定・解放レバー８に形成された切り溝に係合片６４が係合することでお玉に形成された係合部とお玉把持柄に形成された他の係合部とが、接触し固定され、そして固定・解放レバーの操作に伴って双方の係合部の係合が解放される。
【選択図】図１

図　1



【実用新案登録請求の範囲】
【請求項１】
お玉本体と、一方側でお玉本体に一体とされ、他側に係号部を備えたお玉の柄と、お玉把持部と、一方側でお玉把持部に一体とされ、他側に他の係合部を備えたお玉把持柄とを備え、お玉の柄とお玉把持柄が分離可能に結合され、
支点保持用の孔を有し、お玉把持柄に一体で、お玉把持柄から起立するガイド部と、一方側にお玉の柄に接触する接触部を有し、他方側にお玉把持体に近接配設された押え部を有し、接触部と押え部との間に形成され、支点保持用の孔に回転可能に支持される支点部を有する固定・解放レバーと、一方側がお玉把持部に固定され、他方側が押え部に接触して固定・解放レバーをお玉の柄から常時解放方向に押圧する板バネとから構成されるお玉において、
お玉本体側先端に突起が形成され、お玉の柄に、当該突起が挿入される孔が形成され、お玉の柄に切り溝が形成され、固定・解放レバーに切り溝に係合される係合片が形成され、
お玉の柄が、お玉把持柄と接触部との間に挿入され、挿入された時にお玉の柄先端部が板バネによってお玉把持柄に押圧される形態が形成され、この時に固定・解放レバーの操作に伴って突起がお玉の柄に形成された孔に挿入され、固定・解放レバーの切り溝に係合片が係合することでお玉に形成された係合部とお玉把持柄に形成された他の係合部とが、接触し固定され、および固定・解放レバーの操作に伴って双方の係合部の係合が解放されること
を特徴とするお玉の柄とお玉把持部が分離可能に結合されるお玉。
【考案の詳細な説明】
【技術分野】
【０００１】
本考案は、お玉の柄とお玉把持柄が分離可能に結合されるお玉に関する。
【背景技術】
【０００２】
お玉の柄とお玉把持柄が分離可能に結合されるお玉が提案されている。本出願の考案者も今までに幾つかの提案をしており、公開されている。
【０００３】
本願考案者になる考案が特許文献１に公開された。特許文献１には、板バネと、操作・駆動部とを備えた固定・開放レバーとを備えてお玉の柄とお玉把持柄が分離可能に結合されるお玉が記載されている。また、本願考案者になる考案が特許文献２に公開された。この文献には、お玉の柄が、お玉把持柄と接触部との間に挿入され、挿入された時にお玉の柄先端部が板バネによってお玉把持柄に押圧される形態が形成され、固定・解放レバーの操作に伴ってお玉の柄に備えた係合部とお玉把持部に備えた係合部が固定され、あるいは解放されること　を特徴とするお玉の柄とお玉把持柄が分離可能に結合されるお玉が記載されている。
【先行技術文献】
【特許文献】
【０００４】
【特許文献１】実用新案登録第３１８３９０２号実用新案公報
【特許文献２】実用新案登録第３１８８０２４号実用新案公報
【考案の概要】
【考案が解決しようとする課題】
【０００５】
特許文献１あるいは特許文献２に記載されたお玉は、板バネと、操作・駆動部とを備えた固定・開放レバーとを備えてお玉の柄とお玉把持柄が分離可能に結合される構造であり、双方の柄の固定・解放に便利である。このお玉を試作して各種実験を試みて来てみて、お玉の柄をお玉把持部に固定した時に更なる安定性を付与することが望まれることを見つ

け出すに至った。
【０００６】
本考案は、かかる点に鑑みてなされたもので、板バネと、操作・駆動部とを備えた固定・開放レバーとを備えて、お玉の柄とお玉把持柄が分離可能に結合される構造にしたときに、双方の柄の固定・解放に便利であるという利点を活かしながら、特許文献１あるいは特許文献２に記載されたお玉に比べて、お玉の柄をお玉把持部に固定した時に更なる安定性を付与することが出来るようにすることを目的とする。
【課題を解決するための手段】
【０００７】
本考案は、お玉本体と、一方側でお玉本体に一体とされ、他側に係号部を備えたお玉の柄と、お玉把持部と、一方側でお玉把持部に一体とされ、他側に他の係合部を備えたお玉把持柄とを備え、お玉の柄とお玉把持柄が分離可能に結合され、
支点保持用の孔を有し、お玉把持柄に一体で、お玉把持柄から起立するガイド部と、一方側にお玉の柄に接触する接触部を有し、他方側にお玉把持体に近接配設された押え部を有し、接触部と押え部との間に形成され、支点保持用の孔に回転可能に支持される支点部を有する固定・解放レバーと、一方側がお玉把持部に固定され、他方側が押え部に接触して固定・解放レバーをお玉の柄から常時解放方向に押圧する板バネとから構成されるお玉において、
お玉本体側先端に突起が形成され、お玉の柄に、当該突起が挿入される孔が形成され、お玉の柄に切り溝が形成され、固定・解放レバーに切り溝に係合される係合片が形成され、
お玉の柄が、お玉把持柄と接触部との間に挿入され、挿入された時にお玉の柄先端部が板バネによってお玉把持柄に押圧される形態が形成され、この時に固定・解放レバーの操作に伴って突起がお玉の柄に形成された孔に挿入され、固定・解放レバーの切り溝に係合片が係合することでお玉に形成された係合部とお玉把持柄に形成された他の係合部とが、接触し、固定され、および固定・解放レバーの操作に伴って双方の係合部の係合が解放されること
を特徴とするお玉の柄とお玉把持部が分離可能に結合されるお玉を提供する。
【考案の効果】
【０００８】
本考案によれば、固定・解放レバーの操作に伴って突起がお玉の柄に形成された孔に挿入され、固定・解放レバーの切り溝に係合片が係合することでお玉に形成された係号部とお玉把持柄に形成された他の係合部とが、接触し固定され、および固定・解放レバーの操作に伴って双方の係合部の係合が解放されることになって、特許文献１あるいは特許文献２に記載されたお玉に比べて、お玉の柄がお玉把持柄に固定される確固たる固定手段が形成されることになる。これによって、お玉の使用時における安全性が飛躍的に向上する。
【図面の簡単な説明】
【０００９】
【図１】本考案の実施例であるお玉の形態を示す全体図。
【図２】お玉の解放状態を示す図。
【図３】お玉の固定状態を示す図。
【図４】お玉を鍋に付けた状態を示す姿図。
【図５】お玉を鍋に付け、お玉把持柄を外した状態を示す姿図。
【考案を実施するための形態】
【００１０】
以下、本考案の実施例を図面に基づいて説明する。
【実施例】
【００１１】
図１は、本考案になるお玉の実施例の形態を示す全体図である。
【００１２】

図１において、お玉１００は、お玉本体１と、一方側でお玉本体１に一体とされ、他側に係合部３を備えたお玉の柄２と、お玉の握り部となるお玉把持体４と、一方側でお玉把持体４に一体とされ、他側に他の係合部６を備えたお玉把持柄５とを備え、お玉の柄２とお玉把持柄５が分離可能に結合される。お玉の柄２およびお玉把持柄５は、係合部３および係合部６をそれぞれ含む概念であり、それぞれの係合部は、お玉の柄２、お玉把持柄５の一部を構成する。

【００１３】

お玉の柄３は、一枚の板材から形成され、クランク状に曲げ加工され、曲げ部２Aが形成される。

【００１４】

お玉１００は、更に固定・解放レバー８と板バネ７を備える。

【００１５】

固定・解放レバー８は、一枚の板材から形成されて板状をなし、支点保持用の孔１２を有し、お玉把持柄５に一体で、お玉把持柄５から起立するガイド部１１と、一方側にお玉の柄２に接触する接触部１３を有し、他方側にお玉把持体に近接配設された押さえ部１４を有し、接触部１３と押さえ部１４との間に形成され、支点保持用の孔に回転可能に支持される支点部１５を有する。固定・解放レバー８は、本例では板状をなすが、この形状に限定されず、他の形状、例えば扁平状、あるいは丸状であってもよい。以下、板状形態の固定・解放レバー８を例に採って説明する。支点保持用の孔１２は、支持体となる支持部の円滑な回転を実現するために円形状にされ、その中に回転自在に支持部１５を収納する。支点部１５は、固定・解放レバー８の一部であり、板状をなし、固定・解放レバー８から一体的に切り出された図で横方向への小さな突起形状をなす。このように形成することで原価を安くすることができる。

【００１６】

接触部１３は、固定・解放レバー８の先端部が曲げられて構成される。接触部１３の先端は、係合部でもあり、お玉の柄２の係合部３に対して間隙（隙間）を形成することが出来る。この間隙は、板バネ７の常時の押圧作用により“０”間隙となされ得る。

【００１７】

お玉把持柄５は、一枚の板材から形成されて板状をなし、一端側に係号部６が形成され、他端側は、お玉把持体４に一体化される。お玉把持柄５は、右方先端部がお玉把持体４の内部まで到達するように挿入され、樹脂１５が注入され、固定される。入口部に金属製の蓋が設置されてもよい。５１は、お玉掛け用の孔である。

【００１８】

ガイド部１１は、板状のお玉把持柄５の一部が、図で示すように上方に直角に曲げられて起立して形成される。ガイド１１は、お玉本体方向に係合部３をガイドするわずかに起立するサイドガイド部１７を有して形成される。したがって、ガイド部１１は全体的に台状の板状突起形状をなす。再度ガイド部１７はなくてもよい。本例では、ガイド部をお玉把持柄５の曲げ加工によるお玉把持柄一体のものとしているが、別体構成として、お玉把持柄５に固定してもよい。ガイド１１の上端部に支点保持用の孔１２が形成され、この支点保持用の孔１２は、支点部１５を回転可能に保持することが出来る。

【００１９】

このように形成することによって、固定・解放レバー８は、支点保持用の孔１２と支点部１５によって形成される支点を中心として回動することが出来る。支点と言った時に固定・解放レバー８の回転中心を指す。この時、支点から右方の長さは、支点から左方の長さよりも長くしてあり、固定・解放レバー８にテコの原理が作用することで、小さな押圧力で固定・解放ればーの操作が出来るようになっている。また、押圧力は直接的に固定・解放レバー８に作用するように構造を簡単化している。またこの構造によって、全体の高さを引きく抑えることができ、コンパクト化できる。

【００２０】

板バネ７が、お玉把持柄５と固定・解放レバー８の押さえ部１４の間に設置される。板

バネ７は、板バネ材が用いられて板状をなし、一方側がお玉の柄２方向に曲げられ、他方側が接触する部分とされ、板状のお玉把持柄５の上面および押さえ部１４の下面によくフィットする。押さえ部上面は所持者の指が押圧する部分となり、板バネ７が接触する下面とは固定・解放レバーの中央を中心としてほぼ対称をなすことになる。押さえ部１４にはこのように二つの力が作用する。

【００２１】

折り曲げられた部分の先端部は、お玉把持柄５の上面に配設され、クリップ２２でしっかりとお玉把持柄５の上面に固定される。板バネ７が曲げられた時に、左方に突出する曲がり部２３が形成されるが、曲がり部２３とお玉把持柄５の上面との間にはクリップ２２方向に狭まる狭小の間隙２１が形成されることになる。狭小であるが、その入口は開放状態になるので、お玉の柄２の先端部２４の挿入を十分に許容することが出来る。板バネ７の他方側先端部は、押さえ部１４の下面に摺動可能に接触する。板バネ７は、お玉把持部５に固定され、上方先端部に上方に向いた押圧力を発生し、この力は押さ部１４の下面に働くので、固定・解放レバー８の押さえ部１４を常時上方に回動させる方向に作用することになる。この力は、固定・解放レバー８を支点中心に回動させ、常時接触部１３を下方に向ける作用となり、接触部が接触し摩擦力を発生させ後述するようにして固定させる。

【００２２】

本実施例にあっては、以上に説明した構造にお玉本体２に係合させた時に安定させる構造を形成するために、お玉本体側先端に突起６１が形成され、お玉の柄２に、この突起６１が挿入される孔６２が形成される。孔６２は、曲げ部２Aの固定・解放レバー８側に形成され、突起６１を挿入し易くされる。突起６１と孔６２との間にはわずかな間隙が設けられ、突起６２の孔６２への挿入が容易になされる。

【００２３】

お玉の柄２に切り溝６３が形成され、固定・解放レバー８に切り溝６３に係合される係合片６４が形成される。係合片６４は、接触部１３を先端が尖った対状の２つの片が形成されるようにして三角形に削ることで形成される。係合片６４を形成するのに他の部材を必要としない。二股に形成された係合片６４は、各片の間に形成された空隙部にお玉の柄２の切り溝６３間に挿入され、切り溝間に形成された細部６５を挟み込むことができ、挟むことで摩擦力が生じ、お玉の柄２を抑え込むことになる。係合片６４が細部６５を挟み込んだ最終動作状態では、係合片６４は、垂直状配置になるのがよい。垂直状配置でなくてもよいが摩擦力を活用する上で垂直状配置が推奨される。

【００２４】

このように、お玉の柄２が、お玉把持柄５と接触部１３との間に挿入され、挿入された時にお玉の柄先端部が板バネ７によってお玉把持柄５に押圧される形態が形成され、固定・解放レバー８の操作に伴って突起６１がお玉の柄２に形成された孔６２に挿入され、固定・解放レバー８に形成された切り溝６３に係合片６４が係合することでお玉に形成された係合部とお玉把持柄に形成された他の係合部とが、接触し固定され、そして固定・解放レバーの操作に伴って双方の係合部の係合が解放される。係合部の係合によるお玉の柄２の安定確保は、固定・解放レバー８に形成された切り溝６３に係合片６４が係合する形態でも十分であるが、突起６１がお玉の柄２に形成された孔６２に挿入されることで、お玉の柄２と固定・解放レバー８が相対的に横方向にわずかに動くと、それ以上動かず３点による支持確保される。突起６１と孔６２との間にはわずかな間隙以上は動かず、係合部の係合によるお玉の柄２の安定確保はより十分なものとなる。間隙は出来る限り小さく形成することで動きを小さくすることが出来る。間隙を実質零にすれば双方の係号部が相対的に動くことはない。

【００２５】

押さえ部１４の上面を板バネ７の発生する力に勝るように押すと、固定・解放レバー８は反対方向に回動して、接触部１３による接触による摩擦力が解放される。

【００２６】

クランク状に形成されたお玉の柄２には、クランク下側に鍋部用フック３１が取り付け

られる。鍋部用フック３１は、お玉の柄２と同じ幅に形成され、お玉本体２に方向に向けて開放される。お玉の柄２は、ストレート状に形成して、鍋部用フック３１を膨らみのある形状にしてもよい。

【００２７】

このように、お玉の柄２に備えた係合部３とお玉把持部５に備えた係合部６との間に押圧係合が形成され、接触部１３とお玉の柄３との間に押圧係合が形成され得ることになる。

【００２８】

接合時、お玉の柄２が、お玉把持柄２と接触部１３との間に挿入される。挿入された時にお玉の柄の先端部２４が間隙２１に挿入され、板バネ７によって形成された曲がり部によってお玉把持柄５に押圧される形態が形成される。すなわち、固定・解放レバー８の操作に伴って突起６１がお玉の柄２に形成された孔６２に挿入され、固定・解放レバー８に形成された切り溝６３に係合片６４が係合する。これによってお玉の柄２の先端が板バネ７とお玉把持部４とによって保持される。板バネ７に形状はこの形状に限定されない。固定・解放レバー８の操作、すなわち固定、解放操作に伴ってお玉の柄２に備えた係合部３とお玉把持部５に備えた係合部６が固定され、あるいは解放されることになる。

【００２９】

図２は、お玉の解放状態を示す図である。

【００３０】

図２において、固定・解放レバー８の押え部１４を矢印Ａの方向に押すと固定・解放レバー８は、矢印Ｂのように回動して接触部を係合部３から浮かせてその接触力を解放する。

【００３１】

この状態が形成されると、お玉の柄２を左方に引抜き、お玉把持柄５から容易に分離することが出来る。これによって、お玉本体１をお玉把持体４から容易に分離することが出来る。

【００３２】

図３は、お玉の固定状態を示す図である。お玉の固定状態で、全体構造が極めてコンパクトで、安定性が高い。

【００３３】

図３において、押さえ部１４の押さえ部１４を押して、お玉の柄２を、板バネ７の作用によって接触状態を解き、間隙を形成してお玉把持柄５と接触部１３との間に差し込み挿入し、さらに板バネ７の曲がり部によって形成された間隙に差し入れ、曲がり部２３に接触させる。これによってお玉の柄２の先端部が板バネ７に係合、保持される。次に押さえ部１４の力を解くと、固定・解放レバー８は、板バネ７の作用によって矢印Ｃで示すように回動して、接触部１３を係合部３に接触させる。これによって、係合部３と係合部６との間に固定状態が形成される。このようにして係合、保持状態がお玉の柄２とお玉把持柄５との間に形成され、お玉本体の固定がしっかりしたものとなる。

【００３４】

図４は、お玉を鍋に付けた状態を示す姿図である。お玉の固定状態で、全体構造が極めてコンパクトで、安定性が高い。

【００３５】

図４において、お玉本体１とお玉把持体４とが一体結合された状態で、鍋部用フック３１が鍋４１の縁４２に引っ掛けられ、お玉１００が鍋４１に付けられる。お玉１００の形態は、図３に示す図、説明が参照される。複数個のお玉本体１と１個のお玉把持体４を組み合わせることで、大きさの異なるお玉本体１を１個のお玉把持体４に組み合わせることが出来、いずれの組み合わせであっても安全に使用することが出来る。

【００３６】

図５は、お玉を鍋に付け、お玉把持柄を外した状態を示す姿図である。

【００３７】

図５において、お玉の柄２からお玉把持部４が分離され、お玉本体１が鍋４１の縁４２に引っ掛けられる。この状態では、図４と比較すると良く分かるように、お玉本体だけが鍋４１に保持されるので、高さ方向の高さが低いものとなる。このように低い状態が形成されると、お玉本体１を鍋４１に引っ掛け、保持した状態で冷蔵庫に効率よく収納出来るようになる。これによって、お玉毎鍋を冷蔵庫に収納したいというニーズに応えられることになる。

【００３８】

図１には、一つのお玉本体１を示したが、お玉本体１は形状の異なる複数をセットとして鍋料理ごとに使い分けすることが出来る。この場合において、お玉の柄２は、同一形状とする。

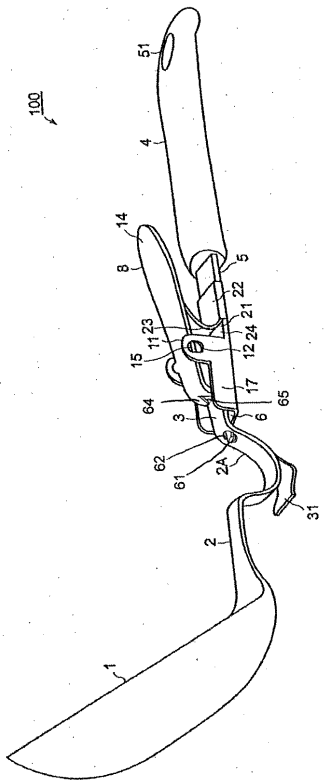
【符号の説明】

【００３９】

１…お玉本体、２…お玉の柄、３…係合部、４…お玉把持体、５…お玉把持柄、６…係合部、８…固定・解放レバー、１１…ガイド、１２…支点保持用の孔、１３…接触部、１４…押さえ部、１５…支持部、２１…間隙、２２…クリップ、２３…板バネ曲がり部、３１…鍋部用フック、６１…突起、６２…孔、６３…切り溝、６４…係合片、６５…細部、１００…お玉。

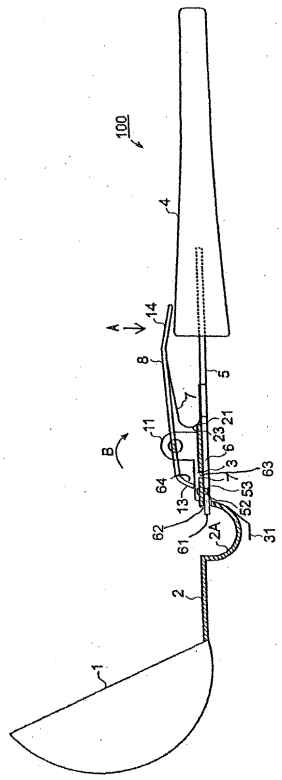
【図１】

図 1



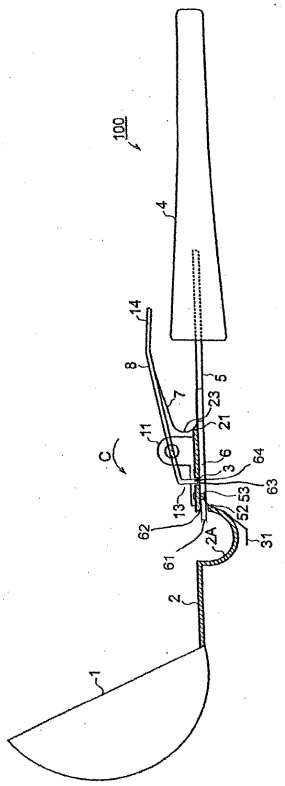
【図２】

図 2



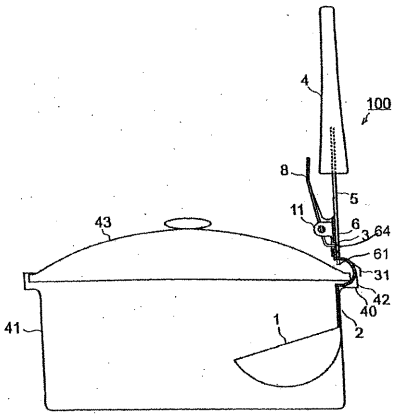
【図３】

図 3



【図４】

図 4



【図５】

図 5

